

令和3年度第1回白河市総合教育会議

議事録

1 日 程 令和3年6月29日(火)

2 場 所 東農業技術センター 1階 会議室

3 開 会 午後1時

4 出席者

(1) 構成員

職名		氏名
市 長		鈴木 和夫
教育委員会	教 育 長	芳賀 祐司
	教育長職務代理者	高橋 顕
	委 員	北條 睦子
	委 員	沼田 鮎美
	委 員	瀧澤 学

(2) 市職員

職名	氏名
市長公室長	鈴木 敏明
市長公室企画政策課長	深町 洋介
市長公室企画政策課主幹兼課長補佐兼企画政策係長	渡邊 正俊
市長公室企画政策課企画政策係主査	水野谷 千春
教育委員会事務局理事兼教育部長	水野谷 茂
教育委員会事務局教育総務課長	田崎 修二
教育委員会事務局学校教育課長	稲川 竜寿
教育委員会事務局学校教育課指導主事	石塚 隆広
教育委員会事務局学校教育課指導主事	山田 淳市

5 議 事

(1) GIGA スクールの現状について

(2) その他

6 閉 会 午後2時30分

1. 開会

- 事務局（司会） 令和3年度第1回白河市総合教育会議を開催する。
原則通り会議を公開とし、傍聴を許可する。

2. 議事（1）GIGA スクールの現状について

- 事務局（司会） 白河市総合教育会議設置要綱第4条第3項の規定により会議の議長は市長とする。

- 鈴木市長 議事（1）の「GIGA スクールの現状」について、事務局より説明を求めます。

- 事務局 文部科学省の GIGA スクール構想は、ICT により誰一人取り残すことなく、個別最適化された教育や、教師・児童生徒の力を最大限に引き出した授業づくりを通して、従来の教育とのベストミックスを図って授業を改善するものであります。1人1台のタブレット端末を整備することにより、教師が子どもの反応をより迅速に把握し、授業を工夫することや子ども自身が自分の習熟度に応じた学習に取り組み、その履歴を振り返るなど、個別学習が強化できること、子ども同士が互いの考えを瞬時に共有し、意見交換が容易になることなど、従来の授業スタイルでは難しかったことが改善されると見込まれております。

白河市としては、歴史・文化教育、読書力を基盤とした学力向上、あるいは、思いやり条例を活かした心の教育などの従来の教育実践をぶれずに継続し、そこに ICT の良さを取り入れベストミックスを図りながら、市の目標である『未来を切り拓く人間力』育成のために努めて参ります。そのための ICT の環境整備として、タブレットを有効に活用できるよう、今後、年次計画で小中学校の普通教室等に大型提示装置の配置を予定しております。

また、現在、各学校では、タブレットの活用準備を進めており、小学校を中心に早い学校では、すでに授業での活用が始まっています。使用方法やルールに関する教員の研修や子どもへの指導、保護者への周知を行い、2学期には持ち帰りを含め、全て学校で活用できるように計画を進めています。

学習場面に応じた活用事例として、一斉学習が挙げられます。大型提示装置への教材の提示、書き込み、音声・動画の活用などにより、子どもの関心を高めることができます。大型提示装置を使うことで、子どもの視線が自然と上上がります。視線を上げて授業ができるという利点があります。

個別学習では、一人一人の習熟度合に応じた学習やインターネットを用いた情報の収集、シミュレーションなどで考えを深める学習、新聞づくりなどを行っています。また、タブレットを家庭に持ち帰って、課題やドリル学習などに使うこともできます。

友達と学び合う協働学習は、発表し合ったり、みんなの意見を話し合ったり整理したり、みんなと一緒に分担して協働制作をしたり、あるいは、他校と交流授業をしたりすることなどもできるようになります。

教科ごとの具体的な活用事例として、教科の特性に応じたタブレットの使い方を紹介します。国語科では、思考を整理し、推考することで、よりよい文章を作成することができます。社会科では、データの収集や加工、地図などの統合ができます。算数・数学科では、関数や図形の変化を実際に動くグラフで可視化することによって、子どもたちが考えを深めることができます。理科では、観察や実験の動画の記録を用いて、考察を深めることができます。外国語では、海外とのコミュニケーションやネイティブな発音でリスニングやスピーキングを学習することができます。

続いて、本日の授業で実践した、タブレットの活用事例を紹介します。まず一つは、考えの集約や比較検討です。互いの考えを一度に共有し、考えをつなげ、比較検討し、考察を深めることができます。次に、双方向授業です。教師が与えた課題をリアルタイムで添削し、子どもに返却することができます。また、ネットワークを介して教師と子ども、子ども同士で情報のやり取りもできます。さらに、Zoom 等を利用すれば、遠隔でビデオ通話などにも活用することもできます。

次に、プレゼン資料や新聞の作成です。本日、6年生の教室に掲示した新聞を見ていただきましたが、アプリを使用すると容易に新聞が作れます。子どもの表現力や発信力など、コミュニケーション能力の育成にも役立てることができると考えています。

次に、タブレット・ドリルです。小中9年間合計約7万の問題があり、小学校・中学校それぞれでどの学年の子も利用でき、自動採点や、解説機能も付いています。そのため、子どもたちは自分のレベルに合った問題に取り組み、上の学年の問題や下の学年の問題にも取り組み、加えて、そうした学習の履歴が保存され、教師が見ることができます。そこで、子どもをつまづきを把握して、指導に活かすこともできます。さらに、土日など休日の家庭学習にもタブレット・ドリルは有効に使えらるかと考えています。

次に、安全面です。不適切なサイトの閲覧を制限できるフィルタリング機能はもちろん、子どもがどのサイトを閲覧したかという履歴もチェックすることができます。そういったことを事前に子どもたちに話をして、不適切なサイトに近づかないことも指導しています。さらには、タブレットを家庭に持ち帰ることを考えて、タブレット使用のルール作りや子どもへの指導、保護者への啓発も行っています。タブレットの管理については、全ての端末を管理できる体制を整備し、アプリの追加・削除を学校側で一斉にすることができます。円滑な ICT 授業の推進や教員の研修のため、各校で ICT 支援員を活用し、相談できる体制を整えています。機器のトラブルについては、ICT 支援員が対応する

ことで、授業を止めずに円滑に進めることができます。

最後に、ICT 教育のこれからの課題やデメリット面への対応について説明します。

1つ目は、機器やソフトの多額の費用負担や維持管理、教職員の研修や授業のサポートの問題です。ICT 機器の効果を上げるため、教職員のスキルアップ研修の継続が求められるとともに、ソフトやハード面の充実も必要です。シンキングツールが豊富な「ロイロノート・スクール」は、欠かせないソフトですが、次年度以降有料になります。また、タッチペンは、学習を進めていく上で有効であると考えていますので、今後全ての児童・生徒分を整備できないか検討していきます。さらに、タブレット・ドリルの次年度以降の活用について検証しているところです。

2つ目は、子どもの学びについての課題です。まずは、視力の低下の問題です。この問題に関しては、30センチ目を離す、30分に1回20秒間遠くを見るなど、ルールを作っておりますが、健康診断等でも注意深く、子どもたちの視力の変化を見ていく必要があると思います。

次に、書く力の低下の問題です。小野田小では、タブレットで文章の構成や組み換えが簡単にできるため、結果的に短時間で多くの文章を作れるようになりました。そのため、より質の高い文章を書ける子どもが増えてきているという報告が上がっています。しかし、漢字の書き取りなど、実際に鉛筆を持って書く活動は重要であるため、紙媒体を使って指導することも必要と考えています。

また、子どもたちはタブレットを用い、すぐにインターネットで検索できるようになります。これにより、何でも検索してしまい、自分で考えようとする想像力が弱くなる心配があります。

バーチャルな学習がしやすいため、実体験が不足することも心配されます。本市では、歴史・文化再発見事業などにしっかりと取り組むなど、実体験を大事にした学習も進めて参ります。

このことから、従来の学習方法と ICT を活用した学習とのベストミックスをどのように図っていくかが課題となってくると考えております。

○市長 小野田小学校での参観を踏まえて、皆様のご意見を伺います。

○瀧澤委員 子どもたちにとっては、すごくいい文房具がひとつ増えたように感じました。一方、先生方は大変だろうと思います。授業でタブレットを活用することは画期的ですが、家では子どもたちは、既にゲーム等でタブレットを使っています。このため、比較的、子どもたちにとっては親しみやすい部分があると思います。不明な点は、タブレットを勉強に活かすために、自宅でもタブレットを使えるようにすることが、正しいのかどうかということです。ゲ

ーム感覚で使ってしまうのではないかと心配しています。しかし、大きな革命であると感じております。

○沼田委員 6年生は、だいぶタブレットを使いこなせているという印象を受けました。また、「ロイロノート・スクール」を駆使して、どういったら良いプレゼンができるのかを考えながら、授業を進めていたのが、非常に印象的でした。一方、いろいろな問題点があると思っています。実用面から言うと、書く力の低下や、文字の自動変換機能による思考の停止、自主学習のスピードの低下もあると思いました。何度も繰り返し学ぶことができる点はとても良いと思いますが、実際に自分で書いて、学習することも必要だと思いました。

○北條委員 私は、障害を持った子どもの授業を見た時、本当に誰一人取り残さないという言葉が浮かびました。以前であれば、支援を必要とする子どもは、情緒的な短歌や俳句をゆっくりじっくり味わうことが難しかったと思います。自分が詠んだうたを聞いて、先生と一緒に味わえることがすばらしいと思いました。昨年11月に授業参観した時は、一斉授業でタブレットを使うことによって、生徒の興味関心をひくことができていました。歴史の原因や経過を導き出して、関心を高めていくことができ、すばらしいと思いました。生徒の中には良い考えを持っていても、なかなか性格的に自分の意見が発表できない子どももいるので、協働学習により自分の考えをまとめ発表につなげられることはすばらしいと思います。

○高橋委員 子どもたちが自分の考えをまとめ、人に分かりやすいように伝えるツールとしては、これほど便利なものはないと思いました。6年生の狛犬の壁新聞は、以前であれば、相当手間のかかることをきれいにこなしていたとメリットを感じました。

しかし、子どもたちが問題を解いている中で、自分の考えが当たっているかどうかだけで判断してしまうところは負の側面であろうと思います。途中の過程で、この子はどういうふう考えているのかが見えなく、果たして自分の考えがどうだったか振り返れなくなってしまいました。学習の履歴というより、つまずきを大事にするにはどうすれば良いのか。また、得られた情報が、本当に正しいのかを考える力を養うことが必要と思う部分がありました。例えば、水を入れて体積がどうなっているのかを検証するやり方があります。動画をうのみにすることなく、実際に水を入れたら本当にそうなるのか、情報を全て正しいと受け止めないで、これは本当に正しいのかと疑うことも、これからの学習の中で必要だと思います。ネットに上がっているから安心だ、先生が書いた資料だから全て正しい、ではなく、そこで立ち止まる、そういう場面も個々の学習の中にあっても良いと思いました。具体的な体験をさせると、誤差が出

てしまうものであり、なぜ誤差が出てくるのかというやりとりも生徒とできると思います。リアルな世界でのズレを認識させる場面も必要だと思いました。良い部分も大変な部分もあると思います。

○**教育長** 歴史再発見事業では、図書館に壁新聞を必ず貼るのですが、小野田小はタブレットで作成しており、大人が作ったように写真をレイアウトし、全部パソコン上の文字で書いていました。また、今日の授業で特に印象的だったのは、難聴学級の児童が俳句を自分の声に出して読んで、録音しながら聞いて、「ロイロノート・スクール」でつなげて、先生とコミュニケーションをとっていたことです。まさしく、ICT を活用した個に応じた授業の代表的な一部分だと思います。

また、タブレットに漢字のドリルがありましたが、文字を書いていると途中から自動変換されていました。小学校の時の学習では、とめ、はね、はらいを丁寧にしなくてはならないものです。ドリルを使う場合には、当然、書き方を十分に学習した上で、ドリルを活用することが必要になると思います。これから、タブレットをどういう場面に活用するかを考えていかなければなりません。

しかし、子どもたちは、これから ICT 環境の中で生きていくので、タブレットをうまく使いこなす力が必要であり、また、教師が使いこなさなければ、授業の質は上がってきませんので、小野田小を参考に、他校でも進めて参りたいと思います。まだ始まったばかりなので、これから更に子どもたちもだんだん慣れてくると思います。1年生が6年後には、今の6年生の数倍も使えるようになってきます。

○**市長** 私も非常に効率的で大変驚きました。おそらく、タブレットの活用が得意な子はどんどん先に進んでいくでしょう。普通の授業でも、もともと個人の差はありますが、ICT でさらに差がつくのではないかと思います。それは、差が出てきてもいいと思っています。一方、授業に付いていけない子どものために、その子を把握して授業を作るということも必要だと思います。タブレットであれば、その子に合った授業ができると思います。そういった意味では、非常に ICT は、授業のあり方を大きく変化させるのだらうと思います。難聴の子の場合、俳句を自分で読んで、自分の声で聞くということが、ICT を使わなければできなかったことでしょう。そういった点は、すばらしいと感動しました。

ひとつ懸念していることは、答えが合っていれば良いという傾向になりがちだという点です。答えが違っていても途中の過程が合っていれば、場合によっては、点数を付けることもでき、評価の基準になったりします。社会を生きていく上で、答えが全く同じであることはなく、むしろ、答えが1つだということをお教え込んでしまうことのほうが心配です。微かなズレは必ずあること

なので、そういったことをどうやって教えていくかは難しいことだと思いました。

コンピューターは、0か1かになってしまいますが、社会はグレーな部分が多いと思います。世の中の複雑さという意味で、高学年にいくにしたがって、そういったものについて何かで補っていく必要があると思います。

また、最初から出てくる命題が正しいものだと全ての問題に対し思い込んでいると、実は非常に怖いことかもしれません。批判精神や疑う精神がないと、施政者やリーダーのままに従ってしまい、議論や理論を挟まないことにつながります。

当然、光があれば影があります。影の部分もこれから掴んで対処する必要があると思います。基本的には、素晴らしい内容であり、先生方のスキルもすばらしく、時代は変わったと思っています。これから先、教育委員会は、タブレットの導入をどのように計画していますか。

○**事務局** タブレットは、全ての小中学校に配置が完了しています。大型提示装置の配置が令和8年度までの計画で進められています。

○**教育長** タブレットだけでは駄目です。例えば、タッチペンを揃えていく必要があります。

○**市長** 学校間で整備状況に差があると、子どもたちに大きな差がついてくると思いますので、早く整備しないといけません。

○**事務局** タッチペンを早急に整備したいと思っています。大型提示装置は、1学年ごとに進める予定です。小学校は令和8年度で完了し、中学校は令和5年度で完了する予定ですが、今後、機材もだんだん値下がりすると見込まれますので、様子を見ながら、少しでも早く購入できれば良いと思っています。

○**高橋委員** タブレット・ドリルに取り組んでいましたが、小中学校では、従来のドリルは、家庭に自己負担してもらって授業で使っています。これまでの冊子と同様に、タブレット・ドリルに変える場合にも自己負担する方向性について検討をしていますか。

○**事務局** 今年度、タブレット・ドリルは無料ですので、学校にその活用をまず進めてもらい、タブレット・ドリルがこれまでの紙媒体のものに取って変わるものなのか、効果検証をして、可能であるならば、一部分なりとも保護者の負担をお願いするなど、検討していかなければなりません。まだ今は、使い始めで、これに切り替えていいかどうか、確信を得てないところですので、今後

検討して参ります。学校の理解も得る必要があると思います。

○市長 タブレット・ドリルは、先行して私立の小学校で導入されているので、負の面も蓄積されていると思います。文部科学省には、そういうデータがあると思いますので、これを活用しつつ、学校の先生に個別にマイナス面について聞くのもいいでしょう。

また、今、間違いなく、書く力が落ちています。スマホに頼ってしまい、知識として自分のものになっていない。何回も書いていくうちに覚えていきますが、ネットだと覚えられなく、忘れていく。また忘れてもネットで検索できるので、支障がない。そういう書く力やプロセスを考えることなどについて、先生の指導があってもいい。

私は、俳句などの感性や情緒はすごく大事だと思っております。書道、絵を直接見たときの感情は、タブレットでは分からないと思います。実際、自分で見てみないと分かりません。そういうのをどうやって補っていくのだろうかと思います。

○教育長 先週、文化振興課の事業で、N響がありました。直接、演奏者が11校の小中学校に来てくれました。子どもたちは、本物に触れることができました。今なら、誰でも、CDなどですばらしい演奏を聴くことができますが、直接の距離で演奏者の息遣いや弦をはじく音などを感じながら、プロの演奏を聴くということは、やはりパソコン上で聞いたものとは、感性といった意味で、大きな違いがあります。パソコン上でいろいろなものを見て経験するだけでなく、本当に直接、生で経験できるものもすごく大事なもので、そのバランスだけは崩さないように取り組んでいかなければならないと思います。

小学校で宿泊学習を那須甲子で行いますが、自然に触れたり、自然を味わったりして、その経験があるから、画像で見てもその時の気持ちがわかるわけです。それがなくて、最初から画像だけであつたら、何の感情も湧かないと思います。6月の下旬ごろの蛍の美しさは、直接そこで経験したことがあるから、美しいと感じるのであろうと思います。ですから、その場面を大事にした教育課程や教育計画を作成しながら、ICT教育とバランスをうまく取っていかねばならないと思っています。

○市長 自然と向き合い果樹を育てる農業は、自然災害を避けて通れないものでありますが、毎日経験を積んで仕事をしている立場から見ると、バーチャルが先行しがちな社会になり、心の中で理解が終わってしまったら、社会や農業に適應できるだろうか、大きな挫折や失敗にならないだろうか、そういう気がするのですが、北條さんはどう思いますか。

○北條委員 小野田小学校では、外に一步出れば、自然や四季の農業を体験することができます。私どものところにも、子どもたちが農業体験に来ます。座学で勉強したことも、農業の作業をすることによって、「あっ、これが実になる」「こういうふうに実がなる」という体験ができ、バーチャルなものの実体験がうまく組み合わされて、人生のバランスが取れ、頭でっかちの子どもに育たないで済むと思います。

バランスだと思います。小野田小学校は、両方体験できるので、良い条件が揃っていると思います。

都市部には都市部の歴史があり、白河の古い伝統、文化があります。小野田地区で、狛犬は東地域でもほとんど知られていなかったわけですが、子どもたちが学校で学習して、それを親に伝えて、文化の体験などもしています。

○市長 子どもたちが制作した狛犬の新聞は、素晴らしいものです。タブレットを使って、写真や文字を入れた新聞を早くきれいにつくることができ、子どもたちはすごい適応能力を持っていると思います。

あとは、バーチャルと実際の乖離をなるべく無くすようにすることが必要だと思います。

どうしても、バーチャルになりがちになるわけですが、リアルとバーチャルの組み合わせが大事になります。教科書のようにそれだけで完結するものもあります。そういったバランスをどうしらいいと思いますか。

○沼田委員 やはり体験を積み重ねることでは、経験は作れないと思うので、あとは家庭のほうが大事だと思います。タブレットを導入することについて、家庭で親の理解をどう得ていくかが重要だと思います。子どもたちにタブレットを預けておけば、その中で何でも体験できると思っている親のほうが多いと思うので、保護者への ICT の教育も必要になってくると思います。ただ、こういうコロナの時期なので、いろいろ見たり聞いたりという経験ができない中ではタブレットを使って体験するというのも一つの方法だと思います。

さらに、今はタブレットですが、今後 10 年先、20 年先に、VR が導入されて、学校にしながら、ルーブル美術館の中を体験できるようになったら楽しいのではないかと考えています。

○市長 確かに、知識の量というのは、ネットの社会になって、ものすごく増えていると思います。膨大な知識を皆さんが持っています。50 年前、60 年前に比べると、圧倒的な知識の量に差があります。しかし、質問するとなかなか答えられない人が多く、知識は多い一方で、自分の価値基準を持たない人ができてきているのではないかと考えています。知っているということは、知っているだけではなくて、そこに自分の人生観や価値観を取り入れていくことだと

思います。小さいうちから、そこを授業でどうカバーしていくか、考えさせていくかが重要だと思います。瀧澤委員は、どう思いますか。

○**瀧澤委員** 検索すれば、なんでも出てくるし、今の子どもたちは、知識を半端に分かっている状態です。体験はしてないけど、知っているというのが、すごく多いと思います。やはり、できる体験を小さいうちに体験させることにより、子どもたちは失敗を繰り返しながら、覚えていくこともあると思います。学校だけでなく、親も家庭で、バーチャル的なものだけでなく、いろいろ経験させるということは、生きていく上で必要だと思います。

○**市長** まったくそのとおりです。仕事柄、色々な人の意見を聞くことが多いのですが、それぞれ表現の仕方は違います。専門用語を並べて、説明する人もいれば、つたない言葉で話をする人もいます。言わんとしていることは同じだった場合、どちらが胸に残るかと言われたら、とうとうと説明するほうはあまり残らないものです。むしろ、とつとつと自分の経験に即して話した人のほうが残ります。

我々は、先入観にとらわれてしまうところがあります。とらわれてしまうと、そこから抜け出すことが容易でなくなってしまう。心のバリアフリーが必要だと思います。先生の言っていることを疑ってかかっている方がいいと言ったほうがちょうどいいのかもしれない。そのほうが、子どもの心は開かれていくのではないかと考えています。いろいろな見方があって、同じ山でも見ようによっては姿が違うように、人もそうだし、社会の理想も見方によって、変わるものです。見る立場や職業によって、また角度によって、社会のあり様は違うものです。

教育とは何かというと、生きるために必要な知識を教えることです。

大学の授業は授業だけならリモートで十分ですが、大学生活の中心はキャンパスという教室とは違う空間で、いろいろな同級生やゼミの先輩・後輩が意見を取り交わすことに意味があると思っています。それができないというのが、大学が今抱えている致命的な問題だと思います。教育とは、知識を得ることを大前提にその先にあるものを得ることが大切だと思います。我々は、人間力と言っていますが、そういうことを先生方に忘れないでほしいと思います。

人間の力を伸ばしてあげることが大目標です。そのために、ICTを使いこなしてより効果的に学ばせることが大切です。バーチャルな世界と非バーチャルな世界を組み合わせることは必要なことです。

ユーチューブで見ていることと実際にやってみることは、全然違って、その差は埋めようがないものです。

6年生は、自由にタブレットを使いこなしており、習得するのが早いです。そういう子が世界に出ていって活躍できるようになると、すごいと思

います。

○**教育長** 先ほど、差が出てくるという話がありましたが、どんどん上の学年のドリルをやっていけるわけで、できる子はどんどん伸びていくと思います。

○**市長** できる子は伸ばしていけばいいと思います。また、サポートを必要とする子はしっかり支えてあげるべきと思います。

○**高橋委員** 体験することや失敗・挫けたことを感じることは、すごく大事なことでと思います。国・社・数・理・英の5教科と、技能教科である体育や技術・家庭、美術なども大事なことでと思います。体育で悔しい思いをすることも大事なことです。体育ができなくても、絵が人並み以上に評価されることもあります。他の教科ができなくてもピアノができる子もいます。技能教科を大事にしてあげることで、ICT 教育で力を入れる教科が出てくると思いますが、技能教科の先生こそ、子どもたちに実際に活動させる場を作ってあげたいと思います。美術の先生も、パソコンを使って子どもたちに絵を描かせる場面があってもいいですが、実際に色を作って染めてみて、描いてみて、修正しながらやってみることも大事だと思います。学校教育の光が当たってこなかった経験ということが大事だと思います。ぜひ、そういう先生方が自信を持って頑張っていたら、子どもたちを鍛えていただきたいと思います。

○**市長** 美術や図工、家庭などが大事なのかもしれません。そういうのは、感覚なので、実際に見なくては分からないものです。なるべく、そういったところに子どもたちを連れていく必要があると思います。

人間の持っている力は、自分で気が付かないこともありますから、いろいろな経験をさせることが重要だと思います。

3. 閉会

○**事務局（司会）**

令和3年度第1回白河市総合教育会議を閉会。